

フランス語学フランス文学専修

本専修の前身である西洋文学第3講座が正式に設置されたのは1925年5月のことであるが、1921年10月、在外研究員として滞仏中の第一高等学校教授太宰施門（1889-1974）の本学助教授任命をもってフランス文学講座の萌芽とみなすことができよう。太宰は1923年2月に帰国、4月から仏文学の授業を開講した。1931年3月には講師であった落合太郎（1886-1969）が助教授に任命され、太宰は1933年3月教授に昇任した（落合は1937年12月教授昇任とともに言語学講座に転じた）。仏文科草創期の講義は太宰の方針で17世紀の古典主義文学や19世紀の小説を中心とする正統的なものだった。また落合はモンテーニュやパスカルなどフランス・モラリスト研究の日本における先覚であった。

1949年5月の太宰の停年退官後は第三高等学校伊吹武彦（1901-1982）、生島遼一（1904-1991）両教授が講師として授業を行い、1950年4月伊吹が本学教授に転じ、本講座担当となった。伊吹は戦後の仏文学研究の著しい進展をふまえて授業内容の充実にも努め、生島に加えて人文科学研究所教授桑原武夫（1904-1988）を授業担当として迎えた。伊吹自身はラクロ、フローベール、A・フランス、プルースト、サルトルの小説や19世紀の詩など幅広く仏文学の翻訳・研究を行う一方、白水社刊『仏和大辞典』の編集にも尽



来訪フランス人教授の講演会（2002年）

力した。1957年5月教養部助教授本城格（1916-1991）が本講座助教授に転じた。本城は特に16世紀プレイヤッド派の詩人を研究対象とした。1961年11月伊吹の停年退官と同時に生島が本講座教授に転じた。生島はラファイエット夫人、スタンダール、フローベールなどの流麗な翻訳で知られ、近現代小説について講義を行った。1968年3月生島の停年退官後、1969年8月本城が教授に昇任した。1971年4月本学助教授として名古屋大学助教授の中川久定が迎えられた。中川はディドロ、ルソーをはじめとする18世紀の思想と文学の研究で知られるが、その関心は哲学、精神分析、日仏交流史など幅広い領域に及び、日本を代表する仏文学者の1人である。

1980年4月本城は停年退官した。同年フランス語学フランス文学第2講座の増設が決まり、4月中川が第1講座教授に昇任するとともに、同助教授として一橋大学助教授の廣田昌義を迎えた。廣田はパスカルを中心としたジャンセニスム思想を主たる研究対象とし、授業では17世紀文学の他にモンテーニュ『エッセー』の演習を継続して担当した。1982年6月教養部助教授吉田城（1950-2005）が第2講座助教授に転じた。吉田はプルースト作品の生成研究で知られ、ガリマール社刊行プレイヤッド叢書に収録される『失われた時を求めて』の校訂・編集に参加し、国際的に高い評価を得た。1984年4月廣田が第2講座教授に昇任した。また1990年11月助手を務めていた田口紀子が第1講座助教授に迎えられ、2講座4名の教授陣が整った。田口はフランス語学からテキスト言語学の領域へと関心を広め、特に小説を対象にしたフィクション論を研究テーマにしている。1994年3月中川は停年退官し、同年4月吉田が第1講座教授に昇任した。1995年4月一橋大学助教授の増田眞が助教授に迎えられた。増田はルソーやディドロを中心とした18世紀の文学・思想を専門とし、特にルソーにおける言語論と政治思想を研究テーマにしている。なお同年4月文学部は大講座制に移行し、翌1996年4月大

学院重点化に伴い本専修は文献文化学専攻欧米語学・欧米文学講座の1分野となった。同年文学研究科に協力講座が設置され、人文科学研究所宇佐美齊教授、大浦康介助教授（2004年4月より同教授）が本専修の教育指導に加わるようになった。2001年3月廣田は停年退官し、同年4月田口が教授に昇任した。2002年4月京都教育大学助教授の永盛克也が助教授に迎えられた。永盛は17世紀演劇を専門とし、特に古典悲劇の理論を研究テーマにしている。2005年6月意欲的に研究活動を続けていた吉田が急逝し、その早すぎる死は国内外の多くの研究者たちによって深く惜しまれた。

京大仏文科の歴史を語る上で、学内外の講師や外国人教師、助手の果たした役割を無視することはできない。特に三高、教養部、総合人間学部、人間・環境学研究科や人文科学研究所から来講した教授陣は仏文科専任教員の専門分野を補完し、卒業論文・修士論文の試問にも加わることで、学生の教育指導に多大な貢献をしてきた。また外国人教師は語学運用能力の訓練だけでなく、フランスの伝統的なテキスト解釈法や小論文執筆の方法を実践的に教授し、さらには仏政府給費留学生試験の準備や修士論文の指導・添削・審査にも関わってきた。このような仏人専任教員を擁することは京大仏文科の大きな特徴である。代々の助手は教務関係の仕事に加え、学生・大学院生のよき相談役として研究室を支えてきたが、1996年4月大学院重点化に伴いポストは廃止された。

フランスおよびフランス語圏の大学の研究者が頻繁に来訪し、講演やセミナーを行うことも本研究室の特徴である。また中川がパリ第3・第7大学の客員教授として招聘された他、吉田もフランスの大学や学術会議に招かれて講演を行うなど、日仏の研究者間の交流はますます活発になってい



外国人教師の授業（仏文研究室、2003年）

る。このような傾向を反映し、本専修によって数度の国際シンポジウムが開催されたことは特筆に値するであろう。中川の企画による「デイドロと18世紀のフランスと日本」（1985年）、「革命と文学」（1989年）、関西日仏学館との共催による「エクリチュール／フィギュール」（1998年）、吉田が主催した「境界なきマルセル・ブルースト」（2003年）、増田が中心となり実現した「対話としてのフランス自伝文学」（2005年）などである。

本専修の学生は狭義の「文学」に限ることなく自由に研究テーマを選ぶことができるが、近年の傾向としては19・20世紀の小説を研究対象とする者が多い。修士論文は正確な仏語で執筆することが要求される。また本専修は学生・大学院生に対し留学を推奨しており、大学間協定や奨学金制度を利用してフランスやスイスの大学に留学する者、フランスの大学において博士論文を執筆する者が多いのも特徴である。なお1958年から1967年まで仏文科の大学院生の研究論文の発表の場として雑誌『Francia』が発行された。1975年には本専修の卒業生を主たる会員とし、大学院生が運営委員を務める京都大学フランス語学フランス文学研究会が組織され、雑誌『仏文研究』が編集・発行されることとなり現在に至っている。

（永盛克也記）